

3 今、なぜ、翻訳の資格か

社団法人 日本翻訳協会 湯浅会長に聴く



湯浅美代子会長

翻訳ビジネスの現況と資格をめぐる国際状況

——「STEP1」に引き続き、日本翻訳協会会長の湯浅美代子さんにお話をうかがいます。今回の『JTA 公認翻訳専門職試験』に伴い、今なぜ翻訳の資格が重要なのか、グローバルな環境変化などの背景と併せてお聞きしたいと思います。

今回の資格試験の新設に先立って、雑誌「リーガルコム」の11月号では、世界標準の「Professional Translator」の資格を特集しました。英語圏を中心に、各国の翻訳団体が定める翻訳能力の条件や認定資格、翻訳専門の教育コースの設置状況などを通じて、海外各国が翻訳の重要性をどう考えているのか、そして世界的な翻訳品質の標準化に向けてどのような動きが起きているかが紹介されています。これらの情報を通じて、オーストラリアのNAATI、米国のATA、イギリスのITIといった団体が定めている翻訳能力資格や認定条件を概観でき、『JTA 公認翻訳専門職試験』の先進性と妥当性に自信を持つことができました。

——どのような状況から、翻訳能力資格の重要性が増していると言えるのでしょうか。

現在の翻訳ビジネス業界を眺めてみましょう。一部ではブランドが確立されて価格プレミアムが生じている一方、分野ごとに価格の値ごろ感にバラツキがあり、標準化が図られていないのが実状だといえます。つまり、翻訳品質のスタンダードが確立しておらず、翻訳者自身も、翻訳会社もクライアントも、関係者すべてが翻訳のクォリティを客観的に判断できないという現実があります。結局、経験的にしか翻訳者の能力を判断できず、顧客と翻訳者が信頼関係を築く手だてが限定されているのです。商品としての翻訳がどうある

べきか、手探りの状態といえます。

——なるほど、それでは発注側も受注側も双方が手探りで翻訳ビジネスを進めなければならず、品質も保証できませんね。

その通りです。こういった事情から、信頼できる第三者機関による、客観的な翻訳能力の証明が求められてきたわけです。第三者的立場で認定した能力資格があれば、それは同時に翻訳の品質とは何か保証されることにもなります。クライアントも翻訳会社も納得し、翻訳者との間で継続した信頼関係を結んでビジネスをスムーズに進めることができますね。つまり、翻訳ビジネスで成功を収める鍵となるのが「資格」だというわけです。

JTA 検定の開始から現在までの環境変化

——JTA では、これまで翻訳検定を実施して来られましたが、時代背景を含めて、これまでの流れを教えてください。

JTA が第1回の検定試験を実施したのは1988年3月です。時の労働大臣の認可を得ています。内容は、ビジネス実務の分野中心の会場試験でした。当時は国家試験に次ぐ認定試験レベルで「翻訳技能審査」という名称でした。1970年代に翻訳会社の多くが誕生し、高度経済成長の中で、翻訳の品質を高めようという機運が高まっていました。翻訳市場が急成長した時期です。その後翻訳市場は成熟し、品質への要求よりは、大量の文書処理をどうするかという観点に移り、機械翻訳が登場します。しかし、商品としての品質には遠く、翻訳者の支援ツールとしての役割が見出されず。その後「翻訳技能認定試験」として一部改訂してきました。しかし、第1回から20年以上が

経過し、翻訳を取り巻く環境もビジネススタイルも大きく変わり、翻訳者のあり方も様変わりしました。ITの発達、グローバル化、産業構造の変化によって、モノよりも情報の価値が高まり、コミュニケーションを円滑に進めることがビジネス成功の鍵となってきました。このようなパラダイムシフトの中で、専門家としての翻訳者の役割が求められるようになりました。EUの誕生により、修士、博士号を持つ翻訳者が登場してきます。欧米では、ローライズ需要とともに翻訳の専門職養成の必要を認識して、大学院レベルでの翻訳者養成コースが開講され、高度な翻訳能力を持ったプロフェッショナルを世に送り出しています。

——バベル翻訳大学院 (BUPST) の設立 (2000年) は、こういった動きに先駆けていたわけですね。こうした現在の環境では、翻訳者と顧客との関係も変わってくると思うのですが。

もちろんです。翻訳者と顧客の関係を一对一の個人的なものと考えるのは、もはや古い概念でしょう。モノよりも情報が激しく行き交うグローバル・ビジネスの中では、翻訳者は個々の人的資源ではなく「翻訳者」という集合体として捉えられ、「顧客」という集合体との関連で、そのあり方が問われることになります。翻訳というビジネスにおける顧客バリューが何で、顧客ニーズを満足させる品質とはどのようなものか、そして、それを実現するために翻訳者に求められる世界レベルの能力は何なのか——このような疑問に答えるためには、現代の翻訳者が有すべきコンピタンス (能力) を明確に規定しなければなりません。

——そのコンピタンスとは、具体的にはどのようなものでしょうか。

BUPSTでは「リテラシー」と言っていますが、今回の試験のためのJTAとBUPSTと協議の結果、コンピタンスと言い換えることにし、次の5つのコア・コンピタンスを定め、Professional Translatorの資格要件としました。そのコンピタンスとは、まずLanguage Competence：言語変換力つまり翻訳文法力です。Cultural Competence：文化、背景知識理解力、Expert (Expertise) Competence：専門実務知

識と翻訳力、例えば、金融・リーガル・メディカルなど各分野の専門知識です。IT Competence：PCやソフトウェアの運用力で、翻訳支援ツールの使用、インターネットサーチなども含みます。Managerial Competence：ビジネスマネジメント力となります。

新たな資格試験創設のねらい

——BUPSTのコア・コンピタンスは、今回の試験と密接に関連しているのですね。

そうです。30年以上のBUPSTの翻訳者養成の実績、研究成果がベースになっています。『JTA公認翻訳専門職試験』は突然できたのではなく、これまでのJTAの20年の実績に、BUPSTの実績を掛け合わせて誕生したといえます。この試験では、翻訳者の能力を5つのコンピタンスの側面から、翻訳専門職としての水準を満たしているかを認定するのです。つまり、翻訳力に加え、その分野でプロフェッショナルとして認められる専門知識、ITを使いこなす能力やリサーチ能力、ビジネス実務能力を兼ね備えて初めて、新時代の翻訳専門職として認められるというわけです。

——最後に、今回の資格認定試験にこめられた湯浅会長の「想い」をお聞かせください。

翻訳のプロフェッショナルとしての総合力を認定対象にしようとする動きは、世界各地で見られます。例えば、EUでは、様々な言語の国家が集まっているという事情もあり、多言語間コミュニケーションの担い手である翻訳者や通訳に必要な能力要件を明確化し、標準化しています。世界をひとつのマーケットとして考えた場合、翻訳品質の保証に関しても世界共通のガイドラインが必要とされるわけですが、私どもが設定した5つのコンピタンスは十分に普遍性があると思いますし、JTAの新資格は世界標準の資格になるものと自負しています。真の国際的翻訳能力資格が重要なステータスとなっている現在、日本が21世紀の翻訳ビジネスをリードし、国際社会に貢献するために尽力していきたいと思っています。